
オレとタマゴと宇宙船（仮）

きいら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレとタマゴと宇宙船（仮）

【Nコード】

N0817R

【作者名】

きいら

【あらすじ】

拾い癖のある小学4年生の礼人^{あやと}がある日拾った謎のタマゴ。そのタマゴから生まれた？ものとは？
わがままな少年に少年が振り回される、ほのぼののコメディー…なのか？

暇つぶしに書いたものなので完結できないかもしれません。

第1話 謎のタマゴ

オレは小さい頃から拾い癖があった。学校の行き帰りに何でもかんでも拾っては親に叱られ捨てられて、それでも懲りずに拾い続けた。そんなオレがある時拾ったのは一つのタマゴだった。学校帰りに公園に寄り道していたら茂みの中で見つけたのだ。

とても大きく手で持てそうになかったから、手提げカバンにそっと押し込んで持ち帰った。

母さんや父さんに見つかったらすぐに捨てられてしまう。家に着いたオレは、とりあえず机の右側の一番下の大きい引き出しにしまった。

「礼人あやと。ちよつとおつかいに行ってきたよ。お母さん、今から美帆みほ迎えに行かなくちゃいけないの」

俺の妹の美帆は保育園の年長さん。来年から幼稚園通いになる。

「何買ってくるの?」

「玉ねぎと牛乳とバナナと...。あつメモ帳に書くわね」

サラサラと子どものオレでもわかるようにとところどころひらがなで書いている。

「はい、メモ帳とお財布。落とさないようにしっかりと持って行くのよ。それと、お菓子買ってもいいわよ」

「ほんと?!」

「100円以内ね」

オレはパタパタと走って玄関まで行き、最近買ってもらったお気に入りの靴を履いた。

「行ってきまーす」

「行ってらっしゃい。車に気をつけるのよ」
「パタンと戸を閉めて...さあ、行くぞ！」

近所のスーパーまでは歩いて行けるほどの近場にあり、信号機を一つ越えてしばらく歩いた所にあった。カゴを持ってスーパーの中に

入った。自動ドアがウィーンと音を立てて開く。中に入るとくだものやら野菜やらが綺麗に並んでオレを出迎えた。

(えーと…たしか玉ねぎだったかな)

4つ折りにしたメモを開き確認する。

玉ねぎ1袋、牛乳1本、バナナ1房、キャベツ1/2カット1つ、
たまご1パック

まず野菜売り場に行き、キャベツと玉ねぎをカゴに入れた。その近くにあった一番大きそうなバナナも入れた。あとは…牛乳だ。

いつも家の冷蔵庫に入っているやつ…M E G A M I L Kを取った。

あとは…、お菓子も買っていていって言われてたな。

お菓子売り場に足を運ぶと、もうそこは誘惑の地。グミやキャラメル、ポテチやチョコレートなどがぎっしり並んでいた。この中からたった一つ選ぶなんて算数のテストよりも難しい。

チョコレートはこの前食べたし、グミは今食べたい気分じゃないし…。ふと目に入ったのはラムネ菓子。いろいろな味があつて、口に入れると溶けてなくなるあの食感。

「決めた！ラムネにしよう」

ラムネの袋を取ってカゴへと運んだ。

(もうこれで買う物はないかな)

メモとカゴの中身を交互に見ると、一つだけ忘れ物があった。

「やばい。たまご忘れるとこだった」

急いでたまご売り場へ行き、パックを掴んだ。

(タマゴ…)

売り場のたまごを見て、拾ったタマゴを思い出した。早く家に帰らないと、捨てられちゃうかもしれない。

足早にレジへ向かい、精算を終わらせスーパーを飛び出した。牛乳

の重みで、ビニール袋の取っ手部分が腕に食い込んで痛い。けど、そんなことよりもタマゴが心配だった。

「た…だいま…」

はあはあ息を切らして階段を駆け上がり、部屋に戻った。右側の一番下の引き出しを開けた。タマゴはちゃんとそこにあった。

「よ、よかつた…」

ふう…とため息をついてまた1階に降りた。台所に行くと母さんは夕飯を作っている真つ最中。

「ただいま…」

「おかえり。思ったより早かつたわね」

当然、走って帰ってきたからな。

「手洗つてらっしゃい。夕飯作るの手伝つて」

「え…」

「え〜じゃないの。4年生なんだから、それくらいやらないと渋々言う通りに手伝うことにした。」

ハンドソープで手を洗ったあと、台所に行くと

「にんじんをこんな風に乱切りにして」

早速仕事を頼まれた。

トントントン。

包丁をリズムよく動かす。

「礼人、だいぶ上手になつたわね」

母さん、それは一体誰のせいだと思う？

「乱切りなんて適当に切れればいいだけだよ。それより、今日の夕飯

…もしかしてカレー？」

テーブルにはグリーンピースがさやから取り出され、置かれていた。

「残念でした。筑前煮よ」

ごぼつを持ってにつこりと笑う母さん。

(筑前煮か。嫌いじゃないけどさ…)

ちよつと残念。

「ほらほら、手が止まつてるわよ?」

「ごぼつを切っている母さんに注意されてしまった。

「そういえば、宿題は？」

「学校で終わらせた」

残っているのは本読みくらいだ。

「そう。じゃあ…」

宿題がないとわかった途端、次から次へと注文をつける。フライパンを持って来いだの、冷蔵庫から出汁を出せだの、炒めるだの…。

結局、この筑前煮、ほとんどオレが作ってんじゃん！

「ただいま」

「おかえりなさい。あなた」

珍しく早い時間に父さんが帰ってきた。

「おっ！今日は筑前煮かぁ。うまそうだな」

「愛情込めて作ったのよ」

ほとんどオレがな。

「ちよつと早いけど、飯にするか」

「そうね」

「じゃあ美帆呼んでくるよ」

きつとおもちや部屋で遊んでるんだろっとな…。

「美帆っつ、みーほっつ！」

「おにいちゃん？」

たくさんのぬいぐるみや人形に埋もれていた。だからこうなる前に片付けろって言うてんのに…。

「みいね、今リンちゃんと遊んでたの」

ほら、と言ってこちらに栗色の髪の女の子の人形を見せる。今、美帆くらいの女の子に人気のスーパードールリンちゃんだ。…正直どうでもいい。

「ご飯だぞ」

「はい」

オレも昔はあややってナント力仮面とかにハマってたんだよなあ。今となっちゃ人形よりもゲームとか外で遊ぶ方が好きだけど。

みんなで夕飯食べたあと、順番に風呂に入った。

今日は美帆を風呂に入れるのは母さんだった。美帆はまだ、1人で風呂に入れないから当番制で入れてやっている。昨日はオレが入れたから、次にオレが入れるのは明後日だ。

「礼人く、お風呂よ」

「うーん」

洗面所に下着やパジャマを持っていく時にふと思った。

（タマゴは温めると孵かえるんだったよな…）

オレは抜き足差し足忍び足で階段を上がり、こそこそとタマゴをお風呂に持ち込んだ。

風呂桶に湯舟のお湯を入れ、タマゴをその中に入れ、それを浴槽に浮かべた。

「これでいいのかな？」

タマゴなんて一度も孵かえしたことがない。

「早く生まれろよ」

優しくタマゴを撫でるとグラツと動いたような気がした。

「え?!」

しかし一瞬だった。そこで、タマゴをコンコンと割れない程度に叩いてみた…が反応はなかった。

でも、まだまだ気長に待つぞ！何日、何ヶ月かかっても絶対孵かえしてやる。

風呂から上がったオレはタマゴを布団に入れて、本格的に孵化活動を始めた。寝る時はタマゴを抱くようにして眠った。

第1話 謎のタマゴ（後書き）

完結できるように頑張ります。

第2話 ツンデレタマロ(前書き)

暇つぶし話を本気で書いてしまいました(^ | ^ ;)
何て言うか…。

1話は何だったんでしよう(^ p ^)
つか本気でこのクオリティwwww

第2話 ツンデレタマゴ

次の日、やっぱりタマゴはタマゴのまままで変化なし。今日は金曜日だからまだ学校はある。

(どうしよう。学校に必要なものは持って来てはいけませんって先生言ってたし……)

でもタマゴを家に置いてる内にピヨピヨとひよこが生まれたら困る。お母さんがその鳴き声を聞いて、捨ててしまってもいいかもしれない。運が悪ければ料理されるかもしれない。

「何してるの？学校、遅れるわよー」

「う、うん！」

と、とりあえず学校に持って行こう。

先生にバレないように手提げに入れ、その上からタオルを被せた。これで外見からはタマゴが入っているなんてことはわからないはず。「行ってきま〜っす！」ランドセルと手提げは結構な重さだったけど、タマゴのためならへっちゃら。

走って班の集合場所に行くいつものメンバーがいた。

オレと1番仲がいい富士翼、ぽっちゃり系の小寺将平、おとなしい五百井祐一君。その他、5年生2人と、6年生3人、1年生4人、2年生3人の計15人の班。

「あと、5分で出発するからな」

6年生の低い声呼びかける。

「はよ〜礼人。それ、何だ？」

「おはよ〜、翼。これは、その……ちょっと……なヤバイ。うまい言い訳が思いつかない。

「もしかして、借りてたマンガとかか？」

「あ、ああ…そうそう。いい加減返さないと、って思ってたさ〜」

「そっか」

なんとかゴマかせたみたい。翼が単純な奴で助かった〜。

「そろそろ行くぞ」

上級生の声でそろそろと2列に並び、歩き始めた。

学校までの距離は近くもなく、遠くもなく…まあ普通。でも今日はこのタマゴがあるからちよつとキツイ。

「大丈夫？持ってあげようか？」

ありがたいけど、この大事なタマゴはどんなに重くてもオレが持つ。

「へーき、へーき。ほら、もう校門見えてきたし」

校門の前に立ち、挨拶する先生が見える。何も無いように平常を装い校門をくぐった。

「おはよう。重そうだね」

「おはようございます…。大丈夫です」

セーフ…。ヒヤヒヤした。…そんなに重そうに見えるのかな？

手提げの中のタオルの上からタマゴを撫でる。

丸みを帯びた感触。

よかった。ちゃんと割れずにあつた。

「なあにやってんだっ？」

「のうわっ！！」

恐る恐る後ろを振り返る…とそこに立っていたのは翼だった。びっくりさせんなよ、まったく…。

「やっぱり何か隠してんだな?!見せろっ!!」

「やーめーろーっ!割れたらどうすんだよ!!」

どうにかして守ろうとしたけれど、ランドセルだけの翼とランドセル+手提げ(タマゴ入り)のオレではどっちが不利かは目に見えてる。あつという間に手提げは翼の手に渡った。

「さてさて、中身は何だるな…」

「あゝっ…!!」

「おっ、何だこれ?…タマゴ?」

バレたーっ…。

こいつのことだから、くれえっとか言っつてせびりそうだな…。

「生まれたら教えてくれよ。真っ先に見に行くからな」

……あれ？

「ほしくないのか？」

「ああ。だって家に犬いるし」

よかった。タマゴは奪われなかった…。

「これ、先生に言わないでくれよな」

「わかってるって。それより、それ、食べたらうまいんじゃないの？」

な、何てことを言い出すんだ。誰がそんなことするんだっ！

「冗談だよ、冗談。早く教室行こうぜ」

今のは冗談に聞こえなかったぞ…。ま、何はともあれタマゴが無事でよかった。

翼も学校の誰にもタマゴのことを話さなかったから、家路につくまで何事もなく帰れた。特に小寺に知られなかっただけでもよかった。あいつはよく食べる奴だからなあ。

「ただい…」

ガチャ。

ん？

ガチャガチャガチャ…。

開かない。家に入られない。母さんが家にいないということだ。もしかして美帆を迎えに行ったのかな？

手持ち無沙汰に郵便箱を開けて、中から郵便物を出そうとすると、紙の感触の他に硬くて冷たい小さな感触も入っていた。

(……?)

取り出してみると、それは家の鍵だった。チラシなどの郵便物の一番上には小さなメモが折りたたまれてあった。そのメモを開いてみると

礼人へ

美帆の調子が悪いつて幼稚園から連絡があつたの。病院に連れていくから5時になつてもお母さんが帰つて来なかつたら夕飯よろしくね。礼人ならカレーくらい作れるよね。

母より

病院に行くつてそんなに具合悪いのかな？…とりあえず家の中入ろう。

鍵を開け中に入るといつも誰かがいるんだけど今日は誰もいない。

何か新鮮。

「ただいま…」

声が静寂に吸い込まれるように消えた。自分の家だけど何だか違って見える。階段を上がる足音さえも響いているように聞こえる。

自分の部屋に戻りランドセルと手提げを置く。

「ふうー」

それにしても面倒なことを頼まれたな。夕飯作つて…だもんな。

カレーくらい作れない訳ではないんだけど、玉ねぎを切るのにも苦戦するのだ。切っていると目が痛くなつて涙が出てきて止まらなくなる。

(まだ3時半だし、母さん帰つて来るよな?)

それまでオレは家でお留守番。仕方ない、ゲームでもするか。

そう思つた時、ひとりでにタマゴが倒れた。

「え…?」

タマゴを手を取つてみるとグラグラと動いている。

「う、生まれる…!誰かーっ!」

あつ…誰もいないんだつた。つて、本当にこれどうしたらいいんだよ?

慌てふためいている間に、タマゴにはジグザグの割れ目が。普通、こんなアニメみたいな綺麗な割れ目はありえないんだけど、慌てて

いたオレにはそんな考えが浮かばなかった。
パカッ。

「ふわああ、よく寝た…」

…え？誰？っていうか、これ人なの？

「お前、何だ？」

最近はこの人形も売ってるのか？

「オレか？オレはこの宇宙船E・G・G7の船長のナツメだ」

宇宙船ってこんなに小さいものなのか？それにこれ、普通に喋ってるし…人形じゃないのか？

「なあ、お前…」

「お前じゃない。ナツメだ」

どっちでもいいよ、そんなこと…。

「じゃあナツメ、その、イージーナントカの宇宙船に乗ってどこから来たんだ？」

見た目はタマゴそっくりの、宇宙船…らしいが。

「聞きたいか？」

ワクワクとした調子で聞いてくる。

「ああ、聞けるなら…」

「そんなに聞きたい？」

「いや、別にそこまで…」

ちよつと知りたいって思っただけだしな…。

「そうか、そうか。そこまで言うなら聞かせてやろう」

人の話聞けよ！！

「聞いて驚くなよ。心の準備はできたか？」

「あ…できた、できた」

うつつうつしいな。言うならさっさとええよ。

「ふっふっふ…。オレはオーバル星から来たオーバル人なのだ！！」
へえ、そりゃあすごい…。ちよつとうさん臭いけど。

「もつと驚けよ！！何だ、そのリアクションは？！」

うげ。ちっこいくせにうるさい。

「うるさい、チビ！」

「おまつ……ふん。この船の光線に浴びたら元の大きさに戻れるんだ。見とけよ」

ちよこちよことさっきのタマゴ（宇宙船）へと向かい、何やらカチヤカチヤいじくり始めた。そしてボタンをポチッと押した。

ガタンガタン、ブー、ぶしゅう……。

何かすごい音がしてちよつとの間タマゴが光って揺れたけどそのあとは動かない。その少しの光を浴びたナツメはちよつと大きくなっていた。

「あれ？」

何度もボタンを押していたが反応なし。どうしたんだと覗き込むと、たしかにタマゴの中は何かのテレビで見たみたいに宇宙船っぽい。母さんや父さんが持っている携帯電話くらいの大きさの画面には赤字で empty と点滅していたがしばらくすると画面が真っ暗に。

「ね、燃料切れだ……」

「それってまずいんじゃないの？」

ナツメの住むオーバル星に帰られないってことだよな。

「おい、ここは何星だ？」

何星って言われても正式名称知らないし。単純に“地球”……でいいのか？

「多分……地球」

「地球……か。遠いな」

家に帰られないこいつを見てるとかわいそうに思えたけど、宇宙船が動かないんじゃないや仕方ない。にしてもこれからどうすんだろな……。

「地球人、腹が減った」

これがさっきまで悲しそうにしていた奴が言うセリフなのか！？つてか、まず時間的に用意しなくてもいいんじゃない……。時計を見ると

時刻は5時10分前。

……もうそろそろ用意した方がよさそうだ。

「待て。どこに行くんだ？」

しつこい奴だな。行動を起こす度に…。

「夕飯作んの」

「オレも行く。地球人、案内しろ」

「さつきからエラソーに…。それにオレは地球人って名前じゃない。礼人だ！あ・や・と！！」

「何でもいいから早くしろ、地球人」

完璧に無視か…。もう、いいや。地球人でも何人でも…。

部屋の戸を開けると後ろからひよこひよこナツメがついて来た。オレが階段を降りていると後ろからナツメが危なっかしい足取りで一段、また一段とそろそろ降りている。90cmほどの体では階段の一段は高く、手を使ってじゃないと危ないのだ。何より時間がかかる。

「…運んでやるよ」

変なところだけ強がるんだな。

「ふん…当たり前だ」

くそ、生意気だな。

抱えて階段を降り、洗面所に行き手を洗わせる。

「何をするんだ！！」

いやあ、この手を見てると赤ちゃんの頃の美帆を思い出すなあ。美帆はおとなしかったけど。

「手を洗わねえと夕飯作れないだろ？」

「作るのはお前だ。オレは食べるだけ」

なんちゅう性格。どんだけ俺様なんだ！

「食べるにしても手え洗え。つか手伝おうとか思わないのか？」

「まったく。これっぽっちもない」

断言しやがった。おかしいな、オレは気の長い方のはずなんだけど…イライラする。

「早く作れ。腹が減りすぎて気がおかしくなりそうだ」

もう、すでにおかしいと思うんだけどな。こんなこと言ったらまたうるさく吠えるだろうから言わないけど。

台所へ行き、冷蔵庫からカレーの材料を出した。
にんじん、玉ねぎ、じゃがいも、ニンニク、肉。

あとは付け合わせのサラダも作ろうかな。ゆで卵も欲しい。

ゆで卵は茹でるだけだから水を張った鍋に入れて放置。それからサラダに取り掛かった。

昨日買ったばかりのキャベツを洗って千切りにしたものとカイワレ大根と油を切ったツナ缶をボウルに入れた。マヨネーズを適当にかけて塩胡椒で味を調べてできあがりっ！

さつきからやけに静かになったと思いい、後ろを向くと、勝手にバナナを剥いて食べていた。もう静かになったらそれでいいから特に何も思わなかった。

さて、次は主役のカレー…の前にゆで卵に塩入れてっ。こうすると殻が割れにくくなるんだよね。

「随分と楽しそうだな」

テーブルの上にバナナの皮を放置したままこちらに来たナツメ。皮くらい捨てる。

「別に。つか手伝え。ほら、包丁」

「刃先を人に向けるな！」

あ…でも受け取ったということは手伝うってことか。

「何を切るんだ？お前か？」

物騒なことを言うな！

「そんな訳ないだろ。…にんじんだ」

ピーラーで皮を剥いたにんじんを渡す。

しかしいつまで経っても切ろうとしない。まさか…

「ナツメ、もしかして料理したことない？」

「ああ。電子レンジで温めるとかならしたことあるけど」

本当なのか？

「今何歳なんだ？」

「10歳」

その身長でオレと同じ年かよー！！そんなことより、今のオレくら

いの奴は料理できない方が普通なのかな？

「あの鍋、なんか危ないぞ」

言われて、見るとやばいくらい沸騰している。慌てて火を止めた。

「じゃあ、にんじんはいいや。ゆで卵の殻剥いてて」

ざるにざあつとゆで卵を移して流水で冷やした。身長約90cmのナツメは流し台に手が届かないので、もちろん踏み台代わりの椅子を用意した。

野菜を切っていると隣からパリパリという殻の剥く音と、熱っ…という声が聞こえてくる。

料理をしたことがない奴が剥いてるからきつと卵の身まで剥いてるんじゃないかと思い見てみると、これが意外にも綺麗にツルンと剥けていた。

「うまいだろ？」

「自分で言うな」

オレはというと、野菜も肉もすべて切り終わり今から炒めるところ。油をひいてニンニクを炒めているといい匂いがし始めた。

「もうできたか？」

この質問を聞いていると、ナツメが本当に料理経験ゼロなんだと思っただ。

「そんな訳ないだろ。見てわかれよ。まだニンニクしか炒めてないんだぞ」

「何だ、使えない奴だな」

なあ、もう殴つてもいい？いや、殴るはやりすぎだな…。せめて叩くくらいならいい？

「手が止まつてる」

「はい…、って何でお前が注意すんだ！！話しかけてきたのはお前だろ?!」

「お前じゃなくてナツメだ。何度言えばわかるんだ？理解力のない奴め」

オレがまだ手を上げないのは料理中だということもあつたけれど、

こんな小さい子を叩いたら泣いてしまおうと思ったからだ。本当は10歳らしいが…。

「黙って殻剥いてる、チビ」

「黙って野菜炒めてる、バカ」

売り言葉に買い言葉。これ以上口を開くとまた面倒なことになるので、文句を言いたいのをぐっと我慢した。

そうこうしている内に肉も野菜もすっかり火が通ったみたい。分量通りの水を入れ、待つこと数分

出た、これが面倒なんだよ…灰汁取り。掬^{すく}っても掬^{すく}ってもどっからか湧き出てくる。

「あゝ、何捨ててるんだ？もったいないな」

オレが灰汁を捨てているのを見て言った。

「こうするとおいしくなるんだよ」

実のところよく理由は知らないんだよな…。

「ふむ。うまく作れよ」

背丈はオレよりはるかに低いのに常に上から目線。どんな風に育てられたんだろな。親の顔が見てみたい。

「ああつ、といけねえ。コンソメ、コンソメ」

灰汁を取り終わった達成感の余韻に浸って、コンソメを入れ忘れるところだった。

弱火で15分くらい煮て、カットトマトを入れてからルーを入れてしばらくしてから火を切った。

これで20分くらい待てばできあがりだ。

「まだか？もう1時間は経ってるぞ」

「ああ、あともうちよつとだ」

6時10分。

まだ美帆と母さんは帰って来ない。父さんはきつと仕事で遅くなっているのだろう。

「美帆と母さん遅いな…」

何かますます心配になってきた。

「誰か待っているのか？」

「母さんと妹だよ」

「お前、妹がいるのか？」

「1人。5歳のな」

それより、このまま帰って来なかったら先にご飯食べていいのかな。オレもお腹空いてきちゃった。

6時半になっても帰って来ないので先に食べることにした。

「もう食べるか」

「おう。早く入れろ」

座布団を積み重ねた椅子に座り、皿を突き出して言う。

高さにナツメ1人でご飯をよそってカレーをかけられないのはわかる。けどもう少し頼み方ってものがあるだろう。

「まったく、もう…ブツブツ」

「地球人は口を開けば文句ばかりだな」

口を開けば命令ばかりのこいつに言われたくないし。

「ほら…」

トン、とご飯とカレーを盛った皿に半分に切ったゆで卵を添えたものと、取り分けたサラダを置く。オレ自身の分も隣の席に置いた。

「いただきます」

へえ、こういう礼儀はちゃんとあるんだ。何か意外…。

「うまいか？」

カレーを一口パクツと食べたのを見計らって聞いた。

「…うまい」

「そっか、よかった」

たとえ腹の立つ奴からでも、うまいと言われれば嫌な気はしない。むしろ嬉しい。

「ま、まあ、あれだけ待たされたら、何だっとうまく思える」

す、素直じゃない奴…！せっかく見直しかけたのに。

「お前も遠慮せずに食べ」

「オレが作ったんだよ！！」

何でこいつが仕切ってたよ。本っ当に意味わからん。

「ただいまーっ」

母さんだ。

オレは食べかけのカレーを置いて玄関へ向かった。そこには大きなダンボールを重そうに置いた母さんと、顔の赤い美帆がいた。

「おかえり。美帆の具合は…ってそれ何？」

うふふと笑ってダンボールを開ける。

「風邪だって。病院行ったあと、スポーツドリンク買いに行っついでに福引きやったら当たったの。たまご1年分！」

「うわあーっ！すごいー！」

…でも、よく考えたらこれどうするんだろな。たまごって腐りやすいよな。

「カレー、ちゃんとできたのね。いい匂い…」

台所へと足を運ぶ母さん。たしかそっちにはナツメが…。

「あら、どちら様？」

「はじめまして。ナツメと申します。お先にお食事いただいています。何だ？その態度は？オレのときと大違いじゃん！」

「小さいのにしっかりしているのね」

「そんなこと…」

性格違いすぎるだろ！！

「礼人、この子どうしたの？」

どうしたもこうしたも…。オーバル星人だって言っても信じてくれないだろっし…。

ここは適当にゴマかしくか。

「友達のおばあちゃんが預かる予定だったんだけど、入院しちゃったんだって。その友達は家計が苦しいからってオレが頼まれたんだ。こんなもんでどうだ！見事なゴマかしだと自分でも思う。」

「そうなの…。好きなだけここにいていいからね、ナツメ君」

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせていただきます」

この二重人格者め。何いい子ぶってたんだ。

「わあ〜っ！みに弟ができた〜」

こんな弟いららないよ。返品したい。いや、その前に借りた覚えもない。

「美帆、寝てなくていいのか？」

「ナツメちゃんとかれえ食べる〜」

聞いてないし。ていうか順応性早っ！！

「ただいま」

父さんだ！父さんならこいつの二重人格を見破ってくれるかもしれない。

「…その子は？」

「お帰りなさいませ、おじ様」

お前はどっかのメイドか！

「おかえり。預かり手がないから家で預かってもいいかしら？」

「おとおさん、お願い…」

あっ、美帆のうるうる攻撃。未だこの家であれに打ち勝った者はいないんだよな…。

「いいぞ。ぼく、何て名前だい？」

「ナツメです」

「そうか、ナツメ君か。遠慮なんてしないでいい。たくさん食べるんだぞ」

「はい！」

オレ、もしかして区別されてる？何かもう人間として自信なくなってきた。

「お、礼人。いたのか？」

「いたよ！さつきからずうっといたよ！！」

息子の存在に気がつかない父ってどうよ？

「ぶ…」

何かナツメに笑われてんのに怒鳴る気力さえない。気に入らないけどオレが拾ったんだし自業自得だよな。

拾ったことを初めて後悔した。

「礼人、食べ終わったんならお皿持ってきて。お母さんが洗うから
オレは言われた通り食器を力チャ力チャ運んだ。当然ナツメの分も」
「その内お風呂に入りなさいね。ナツメ君と」

「なあんでオレがこいつと…」

冗談じゃない。風呂くらいゆつくり一人で入りたい。どうせ一人じやないとしても美帆と入る方が100倍マシだ。

「ナツメ君はあんたに一番懐いてると思うんだけど」

「オレお兄ちゃんがいい！」

オレはいつからお前の兄になったんだ?!こいつ、絶対何か企んでるな…。

母さんの押しも強く、オレがナツメの風呂入れ担当者になってしまった。

「美帆のお風呂入れはもういいから、これからはナツメ君をよろしくね」

そうなると思ってたよ。もう、いいや。宿題でもしよう…。
部屋に戻ってドリルを開く。先生からやってこいと言われた指定のページの問題を書き写す。

(この辺簡単だな…)

シャーペンを淀みなく動かすことができ、難無くクリアー!

「その辺とここ、間違ってるぞ」

「えっ…どこ?って、いつからそこにいた!?!」

ドリルに夢中でまったく気がつかなかった。

「?と?と?。お前がドリル開くときからずっといた」

?と?と?…。本当だ。分母と分子が逆になってた。ていうかこいつ、勉強できたんだ…。

「風呂に行くぞ」

またこのパターン。世界はナツメ中心で回ってるんじゃないぞ。

「替えの服がない。地球人、用意しろ」

毎度、毎度…。

「あのなあ、お前は一体何様なんだ!?!」

「お客様だ。それとお前じゃない。ナツメだ」
もうそのフレーズ聞き飽きたよ。お前って言われるのどんだけ嫌なんだよ…。

「あーもー。わかった、わかった。今用意するからちよつと待て」
たしかこの辺にオレの小さい頃の服とかあったんだよな。…お、あった。

何でまだこんなもの置いてんのか謎だけど、今はとりあえず助かった。

「ほらよ、これで文句ないだろ？あと下着も」

あとはこいつが風呂入っている間に漢字ドリル終わらせるか…。

「…行くぞ」

「え？」

オレはランドセルから漢字ドリルを出す手を止めた。

「行くぞ」

オレの返事がないから聞こえてないと思ったのか、2度言った。

「風呂くらい1人で入れよ」

母さんはオレにナツメと入れと言ったけど風呂場までさすがに覗かれない。1人で入ってるのか2人で入ってるのか磨りガラス越しの外からじゃわからない。

「おばさんはお前と入れと言った」

それはナツメが小さい子どもだと思ったからだろう。オレ以外の人
は事情を知らないからな。

「そんなの気にしなくていいんだよ。あ…でも長湯はすんなよ」

そこまで言ったのに動く気配がない。どうしたんだろう？ま、まさか、ナツメって…。

「もしかして、1人じゃ入れられない…とか」

いや、でも4年生にもなつてそれは…って頷いたーっ！

さっきまであんなにいばつていたのに急にしおらしくなった。耳ま
で真っ赤に染めて俯いている。

「…」

「……………」

何だよ、この沈黙！ 気まずすぎるだろ！！ なんかナツメがかわいそうっていうか惨めに思えてきた。仕方ないな。さすがに風呂くらいはおとなしく入ってくれるだろう。そう信じてオレは立ち上がった。「…うし、行くか！」

オレは美帆のせいもあってか、小さい子に甘いようだ。ナツメを担いで風呂場まで行った。パジャマとバスタオル2枚をカゴに放り投げて服を脱いだ。

ナツメが服を脱ぐ姿を見て気がついたけど、ナツメの服は見かけないデザインをしている。

(やっぱり、宇宙人なのかな…?)

「えっち」

「はあ?! 意味不明なこと言うなよ」

オレがそんな目でお前を見るかつーの!! たく、こいつはオレを何だと思ってるんだ…。

「モタモタするな」

「うっせえーな!!」

「風呂場でわめくな。うるさいのはお前だ」

オレ、いつまでこんな生活続けるんだろ? いつまでこの生活に耐えられるだろ? まだこいつと出会って一日も経っていないのになんか一週間くらいの疲れが溜まった。この疲れは湯舟に浸かるととれるかな?

かけ湯をし、ゆっくり湯舟に浸かる。少し熱めの湯がちょうどいい。

「なあ、おま… ナツメはこれからどうするつもりだよ?」

溺れないようにオレの膝の上に座って湯舟に浸かっているナツメに聞く。

「聞かなくてもわかってるだろ?」

あ… ここにいるって訳ね。

落とし物って人でもいいのかな? 交番に、これ、落とし者ですって言ったら引き取ってくれるかな?

……交番？

「そうだ、警察……」

「ムダだ。地球の警察なんてあてにならない」

「じゃあどうするんだよ？」

このままこの先ずーっとナツメと暮らすなんて何が何でも避けたいオレの自由がなくなるどころか…、ストレスが溜まって死んじゃうよ！

「待てばいいだけだ」

そんな徳川家康みたいにオレは待てないって！！オレのこれからの自由がかかってんだぞ！

「そっちの方が何のあてにもならないじゃん！」

「警察を頼って託児所行きになるよりも、オレの宇宙船についている発信機をたどって誰かが迎えに来るのを待つ方がよっぽどあてになると思うが？」

「あれ、発信機なんてついていたのか！？」

あんな小さな船体にたくさんの機能がついている。

タマゴ型宇宙船、恐るべし…。

「当たり前だ。EG・G7をなめるな」

「はいはい。ほら頭出せよ」

ナツメの頭にシャンプーハットを装着。

美帆のヤツだからピンク色。小学4年の男子がシャンプーハット…

しかもピンク色をつけているなんてかなり笑える。

「こっ、こんな物つけなくたって…」

風呂のせいなのか否か、真っ赤になって反論する。

なぜか今手のかかる子ほどかわいいっていつの、わかった気がする。

「かゆいところはごさいませんか？」

散髪しに行ったときのセリフをふざけて言ってみる。

なんか今ナツメに勝った気がする。

「馬鹿にしゃがって…！」

ナツメは急にこちらにくるりと向いた。何だよと聞こうと思ったそ

のとき、ふんつと掛け声を上げたかと思うとオレの急所を蹴ったのだ。

「~~~~っ…!!」

声にならない声で叫んだ。風呂場なので当然何も身にまとっている訳もなく、スッポンポン。

かなり痛い。声を出して叫ぶのは何とか堪えたけど、心の中じゃまびこのように“痛い”がエコーしている。

「ざまあみる」

お前も同じ男なんだったらこれがどれだけ痛いかわかるだろ…？もう、こうなったら仕返しだっ！

「くらえっ、グリグリ百発！」

「うぎゃあああ〜っ!!」

握りこぶしで頭の側面をぐりぐりする攻撃。これをくらったらたいていの子どもは半ベソをかくんだよな。いつもならそこで勘弁してやるんだけど、今日のオレは許さない。

「ふえっ、ぐすっ…。や…めえっろあ〜」

なんちゆう泣き方するんだっ！女子みたいだな…。なんかオレが罪悪感でいっぱいになっちゃったじゃん。

「ごめん…。やりすぎた…。っていででっ!!」

何なんだと思い、痛みを感じる二の腕を見るとナツメがつねっているのだった。

「こんな嘘泣きに引っかかるなんて、地球人も単純な奴だな」

にやーつと勝ち誇った笑みをこちらに向ける。

やられた…。こんな初歩的な手に引っかかるとは…。

「早く流せ。地球人」

くっそ〜！オレが泣き落としに引っかかりやすいのを知ってるのか？

「早く流してくれたら…お前の背中を流してやらんこともない」

「え?!」

今ちようど肩甲骨の下辺りがかゆいと思ったんだよ。流してくれるんならありがたい。けど…信じてもいいのかな。

ナツメの顔を覗き込むとなんだか照れた様子。どうやら信じてもよさそうだ。

「んじゃあ、頼もっかな」

何だかんだ言っつてこいつ、そんなにオレのこと嫌ってなかったのかも…。

椅子に座り背中を洗ってくれるのを待った。

…オレは一体何度騙されるんだろうか。ただ単にオレが騙されやすい性格なんだろうか。びたり。

背中に柔らかいタオル地が…って何か違うぞ！この肌触り、なんか固い。歯ブラシみたいなの…。こ、これって…！

「ストー…ッブ！ストップ、ストップ！！」

「何だ？騒がしい奴め」

「お前、それ、タワシだろ？」

振り向きナツメの手を見ると、握っているそれはやっぱりタワシ。止めなかったら背中では擦り傷だらけになるところだった。何でタオルがそこにかかっているのにそれを使おうとしなかったんだよ…。

…わざとか？わざとなのか？

「よく汚れを落としてやろうと思ってな。どれ、前も洗ってやろう」

「やめろ！あうっ……」

「汚い顔だな。サービスだ。顔も洗ってやろう」

「もう顔は洗ったよ！！これは自顔だ！」

失礼な奴だなあ。ってか軽くシヨック…。オレ、けっここうモテる方だったんだけど…。去年のバレンタインとかチョコもらったんだけど…。あれは義理ってことだったのか。

「何をモタモタしている？早く洗い流せ」

…さっさと風呂上がっちゃおう。そうしたらもう早く寝よう。漢字をやるのは別に明日でもいい。ナツメを洗い流し、自身も洗い流して風呂を上がった。

乱暴に頭を拭きながらベッドに座る。目の前を見ると、普段何もな
いはずの場所に布団が敷かれていた。おそらく風呂に入ってる間に
母さんが敷いたんだろう。

「お前、そこで寝るよ」

それだけ言うと、俺はベッドに大の字になった。髪の毛は生乾き状
態だったけど、明日は学校は休みだからどうでもいい。

「おい……」

「あーもーおやすみ、おやすみ」

ナツメは何か言いたそうだったけど、俺は無視して寝た。あいつは
口を開けば文句ばかり言うから、どうせ大した用事でもなかった
だろ。あ……ほんとに眠い……。なんか考えんのも……。
オレは眠りの世界へ突入した。

何時間経ったんだろう。

トイレに行きたくて目が覚めた。夜遅くのトイレって嫌いなんだけ
どな……。そんなこと言っても残された道はトイレに行くか、ここ
で漏らすか……。後者は絶対に選びたくないな。仕方なく電気の明か
りで照らされた階段をゆっくり降りた。

しかし、何事もなく無事に用を足し、二階へと上がって自分の部屋
に入った。

「う……ううっ……っく」

え……。？な、何！？もしかして、幽霊？！

うう……変な汗が吹き出てきた。

「おか……さん……」

この声……。ナツメ？

ナツメの方を見ると、布団がもぞもぞ動いている。やっぱり……。

「どうしたんだ？」

ビクツと布団が動いた。

「な、何でも…ない」

いやいや、そんな涙声で言われても説得力ないから。素直じゃないなあ。

「怖い夢でも見たか？」

優しく頭を撫でてやるとしゃくりあげていたのがだんだんと落ち着いてきた。なんかよくわからんが一件落着。さあて寝るか。……ん？何か引つ張られるぞ。ってナツメが引つ張ってたのか。

「…つ緒に…る」

「へ？」

何て言っただ？よく聞き取れなかった。

「一緒に…寝る」

「はあ？」

またそんな訳わからんことを…。ナツメを見ると泣きそうな顔でぎゅっと唇を噛み締めている。

「たたく、もつ…」

「ほら、おとなしく寝ろよ」

オレって何でこう涙に弱いんだろう。

「じゃ、おやすみ」

とは言っただものの、目が冴えて眠れない。羊を数えても眠れない。(羊が102匹、羊が10…。いくらだったっけ？)

たしか100匹は言っただよな。えーと…102くらい？…やめた、やめた。もうおとなしく無心になって寝よう。

「姉…ちゃん…、うぐっ…」

また泣いてる…。母さんの次は姉ちゃんか。もしかして、寂しいのか？

「…大丈夫だ」

後ろから抱きしめるように頭を撫でる。

オレの言葉に根拠なんてものは当然存在しなかった。けど、ナツメ

の不安を除くにはこの言葉しかかけようがなかった。

あれこれとオレに偉そうに言ってたけど、本当は寂しかったんだ。

「地球人のくせに……」

憎まれ口を叩いているのにオレには嬉しそうに聞こえた。

しばらくするとすやすやと規則正しい寝息をたてて眠り始めた。それにつられてオレも眠くなってきた。目を閉じると同時に意識を手放した。

第2話 ツンデレタマロ(後書き)

次話はいつになることやら…(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0817r/>

オレとタマゴと宇宙船（仮）

2011年10月7日20時49分発行